

体験学習プログラム 参加学生レポート集

2021年度 春季

（１）国内体験学習プログラム

「近江八幡の左義長祭

～コロナ禍において伝統文化の継承について考える～」

（２）海外体験学習プログラム

「みんなで考えよう アフガニスタンの事。」

○国内体験学習プログラム／滋賀県近江八幡市【春季】

■参加学生	
岡 智浩（文学部 歴史学科 2年次生）	井上 美咲（農学部 食品栄養学科 2年次生）
堀井 涼花（農学部 食料農業システム学科 2年次生）	美野田 愛（農学部 食料農業システム学科 2年次生）
林 瑞生（文学部 歴史学科 1年次生）	木下 絢斗（法学部 法律学科 1年次生）
川口 克己（社会学部 社会学科 1年次生）	法戸 貴義（社会学部 社会学科 1年次生）
瀧澤 舞花（農学部 資源生物科学科 1年次生）	丸山 汰一（農学部 資源生物科学科 1年次生）
■テーマ 「近江八幡スタディツアー ～近江八幡の左義長 コロナ禍における伝統文化の継承について考える～」	
■企画・引率 國實 紗登美（ボランティア・NPO活動センター ボランティアコーディネーター）	
■協力者・団体 田口真太郎 氏／左義長保存会／一般社団法人近江八幡観光物産協会 他	

1. 目的

伝統文化の継承をはじめ、新型コロナウイルス感染症が地域に及ぼした影響やそれを受けての取り組みなどに焦点を当て、持続可能なまちづくりを考えることを目的としています。

2. プログラム内容

(1) オリエンテーション (Zoom)

2月10日（木）10：00～12：00

- ・自己紹介
- ・参加する上での注意説明
- ・グループ打合せ
- ・感染症対策についての説明 など

(2) フィールドワーク

2月27日（日）9：00～17：00

午前：観光ボランティアガイドの案内によるまち歩き

午後：・グループにわかれて自由散策
・左義長保存会へのヒアリング

2月28日（月）9：45～17：00

午前：ミニ左義長製作体験

昼食：食堂やポネシアで地元食材中心の昼食

午後：・左義長製作現場の見学
・二日間の整理のためのワークショップ

(3) 事後学習会 (Zoom)

3月17日（木）10：00～12：00

オンラインホワイトボード Miro を活用して、ワールドカフェのスタイルでのワークショップを行いました。「未来の伝統文化」「私と伝統文化」というテーマに分かれ、フィールドワークを通して気づいたこと、考えたことなどの意見交換をしました。最後に、プログラム全体を通しての感想を一人ずつ話して、事後学習会を閉会しました。

(4) 左義長まつり（各自自由参加）

3月12日（土）および13日（日）

上記日程で行われた左義長まつりを、プログラムに参加した学生がそれぞれ自由に見学しました。

3. コーディネーター所感

近江八幡で左義長まつりを取り上げたプログラムは3年目となりました。左義長まつりは、国指定無形民俗文化財であると同時に、地域の方々にとっては大切なコミュニケーションの場であり、楽しみにされているものです。昨年は左義長の制作を断念されました。祭ができない悔しさと大切な祭りだからこそ、未来に伝えていくための判断であったと思います。今年は、左義長の制作においても感染症対策を徹底され、どうしたらできるかという発想で取り組んでこられました。そういった取り組みや祭りに対する熱い思いを多くの方からお話を伺うことができました。

コロナ禍において、私達の生活も変化を余儀なくされました。必要に迫られた変化ではあるもの、社会の状況に合わせて変化するという事は、いつの時代にもあることです。変化をし、行動していくことで、新しい社会が創られていくのだと思います。

伝統文化を継承するということは、変化をしていくことだということを、この左義長まつりを通じて学生と学んできました。その時代に応じて形や方法を変え、今に繋がっているのは、祭を大切にされている地域住民の熱い思いがあるからこそであり、その思いが、若者、そして子どもたちへと伝えられています。学生は、その熱い思いを受け取り、今、自分たちに何ができるのかを考え、行動し、新しい社会を創ってほしいと思います。

〈報告者：國實 紗登美

（瀬田キャンパスコーディネーター）〉

「伝統文化に対する地域住民の思い」

今回の近江八幡スタディツアーでは、伝統文化と地域の関係性に重点を置きながら参加していた。近江八幡には昔から商人としての名残が残り、現在では各業界に名を馳せる会社の総本家も置かれている。また、建築家で近江八幡名誉市民でもある W.M.ヴォーリズが近江八幡の街づくりに尽力され、日本でも珍しい和洋折衷な建築物も多い。こうした特徴的な街並みを見学して私は懐かしさというものを感じた。こうした伝統的な景観を保っている街は少なく、京都でもあまり見かけない。まるで、タイムスリップしたかのように感じるほど新鮮な気分だった。文化や時代の流れが激しい現代の最中、このような街並みが今もなお保存されているということは、近江八幡市民の方々の尽力があってこそだと思う。八幡山城の麓にある八幡堀は、地元の方々が資金を出し合うなど協力することによって美しい景観を保たれてきたという。伝統的な街並みと八幡堀のお話をお伺いした時、近江八幡という地域は人々に愛されているということを感じた。



近江八幡名物「つぶら餅」

各地域に受け継がれている伝統文化や文化財は保存していかなければならないとよく耳にする。だが、実際に保存し継承していくのは、当事者つまり地域の方々だ。地域住民がその地域にまつわる伝統文化に愛着が無ければ、保存する意欲が減少して廃れてしまう一方だ。だが、今回の近江八幡は人々に愛され、伝統文化である左義長祭りも子どもたちや地方に出向いた方々も参加されている。この二つのことを通じて私は、伝統文化を継承していく上で地域住民

の繋げるという思いは非常に大切だということを学んだ。これは、一種の感情論で根拠のない考え方と思われても仕方がない。だが、伝統文化が今まで残された理由の中には、学術論拠では証明できない人々の思いが含まれていることも事実だ。私自身、京都出身であり、生活の中に伝統的なモノが写り込むことは日常的であり当たり前のモノであった。だが、近江八幡の方々のようにこの街が好きだから守ろうという思いは無い。近所でも昔ながらの田んぼが埋め立てられ、新築物件が立ち始めていることから、地域全体としては景観を保護する考えはないように感じる。そのため、私が住む街の景観は変貌しつつある。これは、近江八幡のように歴史がないことも原因の一つだ。だが、全てを新しいものに変えるのは虚しさを感じる。これも温故知新を街全体で表現した近江八幡を見たからこそ感じたことだ。



激しくぶつかり合うケンカの様子

近江八幡スタディツアーでは、伝統文化と地域の関係性の観点から様々な考え方を知ることができた。また、街並みから改めて古き日本の良さを認識させられた。伝統文化を未来の世代に繋げていくためには 1 人だけではなく地域全体の思いが重要であることを、近江八幡の街並み、そして町民の方々から学んだ。

近江八幡のスタディツアー、ありがとうございました。とても貴重な体験ができたと思います。左義長まつりについてのお話は、非常に濃いお話を聞かせていただきました。地域活性だけでなく、住民の生きがいにもつながるようなお祭りが県内にあるとは知りませんでした。伝統的な、住民のだれもが活気あふれることができるお祭りは、ぜひこれからも引き継いでいってほしいと感じました。

また、ボランティアガイドさんに案内していただいた近江八幡市内も非常に興味深いものでした。歴史を感じる立派な家からは、なぜか松が飛び出していました。この松は、「見越しの松」といい、江戸の末期から存在しているということ、その松の木から屋敷の中にいる番頭さんが外の情報を吸い上げて商売がうまくいくようにとの願掛けがあるということを教えていただきました。ご近所にも立派な木が植えてある家がいくつかあるのですが、何か理由があるのではないかと考えさせられました。

二日目の昼食では赤こんにゃくいただきました。小さなころに何度か食べていたものの、最近では食べていなかったのもとても懐かしかったです。大学生になると滋賀県外の人とのかかわりがかなり増えました。その誰もが、おそらく赤こんにゃくの存在を知らないのではないかと考えると、少し寂しくなります。ぜひ、もっと広げていきたい食べ物です。見た目はびっくりしますが、味にクセがあるわけではなく、万人受けすると思います。外食をしても、赤こんにゃくが出ることはめったにないので、昼食に出していただいたときはとても感動しました。

滋賀県で有名な食べ物といえば鮒ずしではないかと思います。しかし、私の身近なところではあまり見かけません。近江八幡に行って、初めて鮒ずしを販売しているところを見て、もしかして近江八幡が発祥なのか、と思ってしまうほどでした。調べてみたところ、滋賀県全域だということでした。近江八幡は滋賀の中でも観光地に分類されていたり、八幡商人など商売に精通した方々が昔から住んでいたから、よく

見かけたのかもしれないと考えました。今回は勇気が出ず食べていませんが、機会があれば一度は食べてみたいです。



いろんなとび太くん

また、街を歩いていると、たくさんの「とび太くん」がいました。とび太くんはよく見かけるので特に何とも思うことはなかったのですが、近江八幡ならではの姿をしたものがたくさん見つかりました。とてもかわいかったです。飛び出し坊やが滋賀県発祥だという話は聞いていたのですが、大津市では、近江八幡ほど多種多様な飛び出し坊やを見たことはなく、とても新鮮でした。飛び出し坊や巡りだけでも一日楽しめるのではないかと思います。実際に、街歩きの際に見つけるたびに写真を撮っていたのですが、調べてみるともっと存在していることが分かりました。後日、とび太君巡りに再チャレンジしたいです。また、県内の交通事故での死亡事故件数推移が史上最多で昭和 44 年の 255 人のところ、平成 21 年には 65 人と、かなり減っているということが分かりました。飛び出し坊やの効果があるのかもしれませんが、かわいだけでなく、交通安全にも役に立っているとびた君、さすがですね！

「近江八幡スタディツアーに参加して」

2 日間のスタディツアーで、ボランティアガイドの方に近江八幡の資料館や街並みを紹介していただいたり、左義長の製作体験や製作現場の見学をしたりした。

歴史民俗資料館や旧西川家住宅ではさまざまな展示品を見た。詳しい説明もあり、昔どのように商売を行っていたのか想像することができた。八幡堀はとても美しかった。夜になり、光で照らされている様子は日中とはまた違う良さがあった。春には桜、夏には菖蒲で彩られるそうで、その様子も見たいと思った。この他にも、ロープウェイや美味しい食事ができるお店などたくさんの魅力的なスポットがあった。



ライトアップされた八幡堀

宮内町の製作現場の見学をした際には、間近で作っている様子や出来上がった作品を見ることができた。ヤングコーンやキウイの皮などを使用するというさまざまな工夫、アイデアや、一つ一つの作品の細かさに感動した。作品のどこを見ても繊細に作られていることが分かり、技術の高さに圧倒された。見学したときにいらっしやった地元の大学生は、いずれは自分もダシをデザインしたいと話しておられた。構成のアイデアを得るために美術作品を見に行くこともあるそう。この地域の人にとっては、左義長まつりはあることが当たり前であり、普段の生活の中でも意識しているものなのだということが分かった。だからこそ、コロナの影響で左義長まつりが開催できなかった時の喪失感

はかなり大きなものであっただろうと想像した。

左義長まつりでは、長い期間やたくさんの人手をかけて作ったダシを最後は奉火する。燃やすので、形としては何も残らない。それを伝統として受け継いでいる。形に残らないものを伝統文化として受け継いでいくのは難しいのではないかと思ったが、難しいどころか年々製作技術が上がってきているそうで、素晴らしいと思った。コロナによる影響で左義長まつりを知らない世代が生まれ、その世代に知ってもらうためにお話を実施するという取り組みも行っており、左義長まつりが大好きな人たちの、左義長まつりを大事にする強い思いがあるからこそ、この伝統文化は発展し、活気や迫力のある祭りが行えているのだらうと感じた。

私は左義長まつりが行われた日に見に行った。ダシが街を練り歩く様子やダシ同士がぶつかり合うけんか、最後の奉火を見た。楽しそうに、真剣に祭りに参加する地元の人がとても印象的だった。今回の近江八幡スタディツアーに参加したことで、実際に祭りをみて楽しむだけでなく、製作過程やその祭りへの人々の熱い思い、祭りによって生み出される幅広い人と人との繋がりなど多くのことを知るといふ祭りの味わい方ができた。

「近江八幡スタディツアーに参加して」

2 日間のフィールドワークと事前事後学習を通して、知らなかったことや近江八幡の魅力を感じた。フィールドワークでは、特に昔の建物と現代の食文化が共存していたことと、ダシ制作の見学が印象に残っている。

近江八幡には昔の建物を使って街並みを残しつつ、現代特有の多様な食文化を取り入れたお店がたくさんあり、とても魅力的に感じた。建物は瓦が使われており、きれいな外観で、私が住んでいるところでは見ないつくりの建物の為、おしゃれに感じた。今回訪問した近江八幡の古い街並みの地域は、駅からのアクセスがあまりよくないにも関わらず、平日でも観光客が意外と多かった。これは、地域の人が建物を修繕し、ボランティアさんが近江八幡の魅力を語り継いできたからだと感じた。

また、近江八幡の伝統文化である左義長は、毎年新しいダシをゼロから作っていることを知り、とても驚いた。ダシの制作現場を見て、とても細かい作業で、すべてがハイクオリティだった。みんなで協力して長い時間をかけて完成に向けて作業していることが分かった。見学した宮内町の人から実際にお話を聞いて、祭りへの思いやコロナ禍での苦労をお聞きした。大変なことも多い中で、一生懸命されていることを知り、みんなが誇りを持ってお祭りに挑んでいることが分かった。さらに、実際にお話を聞き、事後学習をしたことで、私は伝統文化継承の必要性を学んだ。特に左義長は、町の人が集まって作業をするため、情報収集する一つの場であり、交流の場であることを知った。一度地元を離れても左義長まつりに参加するために毎年必ず地元に戻ってくる人がいたり、近江八幡以外の地域に住んでいる友達も一緒に祭りに参加するなど、左義長まつりは地元の人にとって大きな存在であり、誰もが参加できるお祭りであることが分かった。

あって当たり前のものという認識でいた左義長まつりが、コロナ禍で規模縮小での開催

や左義長製作中止などになり、知らない年代が出てきてしまうなど、当たり前ではなくなってきた。当たり前ではなくなってしまうと、地域の人同士の交流の機会が減少し、ダシを作る技術が継承されないなど様々な問題が出てくるのではないと思う。そうさせないために、地域の人は時代に合わせて活動の方法を変えながら、活動していた。お祭りがあることで、町の活性化にもつながり、たくさんのメリットがあると思う。だからこそ、伝統文化は次世代に継承し、守っていく必要があると感じた。



ダシ製作の様子

滋賀で下宿していても、このスタディツアーに参加しないと知ることができないことばかりだったので、参加することができて本当によかったと思う。

今回の近江八幡の左義長まつりに関する体験学習プログラムに参加し、まず学んだことは、伝統の継承は同じことを続けていけばよいというものではなく、新たなことを取り入れていかなければならないという事だ。私は、「伝統」というと、伝統と言われるものが始まった当初から代々形を変えずにそのまま受け継がれていくものであるというように考えていた。例えば、女性の参加禁止や集落外部の人間の参加禁止などである。しかし、近江八幡の左義長まつりは女性が参加していたり、外部の人間の参加も認めていたり、左義長のダシ製作に新たな素材を利用したり、少子高齢化に対応したり、現代の技術の進歩を取り入れていた。また、新しいものを取り入れていくときや祭りの継承には若い世代の力が必要であるという事を学んだ。



炎に包まれる虎

そして気づいたことは、左義長まつりは子どもが成長したことを親やまちの大人が実感できる、また子ども自身が大人に近づいたと感じられる行事であるという事だ。宮内町のムシを作っておられた野村さんは、「親がムシを作る姿を見て家で真似して作っていて、あこがれていた」と言われていた。また、話を聞いた地元の大学生は、「小さいときに町の人

たちが左義長を担いでいるのを見て早く持ちたいというあこがれがあった」という風に言っておられた。このようなことから、親や周りの大人は地域の子どもの左義長を自分たちと一緒に担いで歩けるようになったり、製作に携わることができるようになったことで子どもの成長を感じることができ、子どもはあこがれていた左義長を担ぐことができるようになったり、ダシ製作に携わることができるようになったりすることで、自分は大人に近づくことができたという意識が生まれるのではないかと考えた。また、幼いころから左義長まつりに関わることで、地域の人との交流ができ地域に対する愛着や愛情というものが芽生えるのではないかと考えた。

最後に上記のことを学び、気づいたことで近江八幡の左義長まつりのような祭りは、幼少期から他人と協力し同じ目標に向かって作業するという社会の勉強になるものであると感じた。そのため、学校では得ることのできない幅広い世代での共同作業という貴重な体験をすることができる素晴らしい行事だと考える。そのため、左義長まつりが今後も年々進化しながら行われていくために、私たちは左義長のことを知りそして、知らない人にこのような祭りがあるという事を広めていくことが私たちのできることの第一歩ではないかと考える。

今回の近江八幡スタディツアーを通し、僕は伝統文化の大切さと伝統文化が町にもたらす影響の大きさを学んだ。もともと、僕は伝統文化のことが好きで関心があった。伝統文化は歴史がある大切なものであり残していくべきものであるという考えを持っており、それがこのスタディツアーへの参加を決めた理由の一つでもあった。



八幡堀

今回の学習の中でボランティアガイドの方や左義長保存会の方々の話を聞き、伝統文化が存在し、それを続けていくことの大切さを再確認できたように思う。左義長保存会の方々や左義長制作に関わっている方々が左義長まつりや近江八幡のことを熱く語っている姿を見て、左義長まつりや近江八幡のことが本当に好きなのだと感じ、大人になってからでも何か熱中できるものがあるということは素敵なことだと感じた。左義長まつりがあるおかげで、生涯を通して熱中できるものができて、目標ができて、思い出を作ることができて、地域全体が一つになり、地元に戻ってくる理由にもなる。これだけ多くの良い影響を与え、自分たちの出身地を好きになり、誇ることができるようになる伝統的な文化があるということは非常に素敵なことであると思い、そのようなお祭りがある

近江八幡のことが羨ましく感じた。

そもそも伝統文化に関心がない人がいたり、少子高齢化などの理由により伝統文化の継承が難しくなっている現状がある。左義長まつりの様にコロナ化の中でも心の拠り所となることができる伝統文化があるということは貴重で素晴らしいことであると気付いた。またこのような影響を与える力を持っている伝統文化を残していくことは大切なことであると感じた。

一日目のヒアリングで観光物産協会の方がおっしゃっていた「良い街とはホテルなどがある街のことを指すのではなく、残していきたいものがあり、それらを残そうとする情熱を持っている人たちが多くいる街のことである。」という言葉に、左義長まつりや近江八幡を良い街にしていこうという強い気持ちを感じ共感を覚えたため、強く印象に残っている。またこの言葉を聞き、自分が自分の出身地の伝統文化や昔からあるものについては、あまり詳しくないことに気付いた。それらを調べ、それらを残していくために自分には何ができるのかを考えていきたいと思う。

「左義長は青春」

今回のフィールドワークで強く感じたことは、近江八幡、特に旧市街地の地域性と地域の人々のつながりの強さである。

まず、近江八幡の伝統的な祭りである近江八幡左義長まつりは、現在でこそ土着的な祭りであるように見えるが、元々の左義長まつりは旧市街地ではなく安土の地で開催されていた。後に安土の住人が今の旧市街地に移住することで、祭りの文化圏が拡大し、日牟礼八幡宮でも開催されるようになった。そして、近江商人が全国各地で活躍するようになった後、その地の祭りを持ち帰り、近江八幡左義長まつりに組み込まれていったことで現在の独自性あふれる祭りに変化していった。近江八幡左義長まつりは、様々な文化が混合した祭りであり、時代によって形を変えていった祭りであると言える。



奉火の様子。左義長が大きな火柱に包まれる。祭りのクライマックスであり、「チョウヤレ」という掛け声とともに、場が大きく盛り上がる。

このような独自の変化を遂げてきた近江八幡左義長まつりでは、13 の奉納町がそれぞれ1基ずつダシを作成し、奉納している。その作成には多くの時間、多くの人手、多額の費用が必要になる。そして、それを支える力になっているのは各町民の支援と協力だ。それ故に、近江八幡左義長まつりは町中が一体となって開催される。祭りのために町民が連帯し、コミュニティを作り上げている。

ダシの作成にかかる時間は1～2か月、その

準備を含めると半年近くかかる。これらをそれぞれの奉納町の町人が総出となって、協力しながら進めていく。それには老若男女問わず、誰もが参加することが出来る。これは誰もが何かしらできることがあるという意識が祭りの精神に含まれている。作業を進めていく中で、町人同士の交流が活発になる。自然に町人全員とご近所づきあいができるようになる。祭りによって町人全体に強い結びつきが生まれるのだ。この結びつきは出来上がったダシや祭りのクライマックスの奉火の際に感じる事が出来る。そして、この結びつきは人々がこれによって、災害時における安否確認を容易にしたり、孤独死の予防などのメリットが生まれている。また、町を出た若者が街に帰ってくるきっかけにもなっている。

私はこの祭りがまるで文化祭のように感じた。奉納町が1つのクラスであり、それぞれのクラスが祭りを素晴らしいものにしようと、他のクラスよりも良い出し物をつくろうと切磋琢磨している。なによりも楽しんでいるのが印象的だった。この祭りによって近江八幡のまちが活性化している。地域の活性化とはその土地にする人々の活性化なのかもしれない。

小さい時に見てきた祭りに触れて、祭りと地域の相性が抜群だと感じた。全国では祭りがコロナの影響で休止になるというニュースばかりを聞いて実際どんな気持ちで祭りに臨んでいたか気になっていた。でも実際に問いに答えてくださった方は祭りに対しての思いが強くとにかく開催させたいという信念を持って頑張っておられることが伝わってきた。

まず、左義長まつりの流れとして1日目は左義長のお披露目である渡御と左義長のダシのコンクールが行われる。2日目は自由げい歩があり、「けんか」と呼ばれる組合せをして、夜に奉火して終える。その中でも見どころは二つある。一つは「けんか」である。「けんか」は左義長のぶつかり合いで、掛け声をかけながら派手な服を着た参加者が左義長の押し合いをすることで、観客を沸かせている。もう一つは「奉火」で、1年かけて作り上げた左義長を燃やし、寂しさも残る中、奉火した左義長の周りを囲んで回るクライマックスが見どころである。

左義長まつりの良いところは、チャレンジ精神があり、常に新しいものや進化を求めているところだと思う。そのため、観光客はより祭りが新鮮に見えることで楽しめる祭りだと思う。また派手な服を着ることが特徴の祭りでもあるため、新しいことやコスプレなどが好きな人にとっては、楽しむことができる。そして、観光客が訪れることによって地域の活性化ができる。また、ダシは、地域の方々が集まって制作している。そのため、制作場所はコミュニケーションの場所として活用することで地域の仲が深まる。それによって孤立を防ぐことや若者が地域に帰ってくるキッカケの場所にもなる。また、災害が起きた時に安否確認など含めて効率よく進めることが可能だと考える。

左義長まつりに関わっている方々に話を聞かせてもらった。話してくださった方は、新型コロナの感染拡大に負けないぐらい、祭りに対する熱い気持ちを持っておられた。実際に左義長まつりの2日目を見て、左義長を担ぐ人数を減らして町内を周ったりけんかをしているこ

とに気づいた。コロナ感染対策をしながら町全体を盛り上げて活性化していると感じた。コロナ感染が収束した時には、より多くの観光客を入れて祭り全体にもっと活気があふれ、みんなが楽しんでいるところをもう一度見てみたい。



左義長制作体験の際に撮影した集合写真

私は滋賀県に住んでいて、子どもの頃、初めて見た祭りが左義長まつりだった。左義長まつりの素晴らしいところをより多くの人に見てもらいたいので、SNSを活用して左義長まつりのことを発信することや他県に住む大学の友達を連れていくなどしていきたい。私はこれから、左義長まつりを無くさないために次の世代へと繋げる活動をしていきたい。

今回のツアーを通して、「人の繋がり」について学んだ。他にも左義長まつりの歴史や近江八幡市の取り組みについても学んだが、最終的には全てそこに繋がるのではないかと考えた。今は特に新型コロナウイルスの影響で自粛を求められ、大学の講義もオンラインのことが多い。少し前なら「人と会う」ことは普通のことだと思っていたので、直接会ったり話したりすることに何も感じていなかった。



受け継がれるもの

左義長まつりはムシという干支の飾り物のデザインに始まり、制作し、左義長を担いで巡行し、最後には奉納するため火をつける。どの過程を見ても決して1人で出来るものはない。人が集まって、話し合って動いてようやく完成するものだと感じた。わたしは、この過程が文化祭や部活動などに似ていると思った。このような学校行事で今まで話す機会がなかった人と仲良くなれたり、意外な一面が見れたりする瞬間を経験したことがある。もちろん全てが思い通りに上手くいくわけではないが、その失敗も今思うと良い経験だったと言える。人の繋がりだけではなく、これから先何度味わえるかわからない団結力や大きな達成感を感じる機会をわたしはコロナで何度も奪われたのだ。わたしは祭りの二日間とも訪れたが、特に町内の人が声を出して左義長を担いでいる姿には心を動かされた。奉納までの約2時間、ただいくつもの左義長が宮内に担がれていく姿を眺めていた。あの熱に帯びた空気や地元の大人たちが嬉しそうにしている姿を生に感じる事ができた。まるでわたしが奪われた時間を再現し、

その体験をできたような気がした。また見ていだけでその疑似体験ができ、実際に担いでみたいと強く思った。

コロナで出来ないことはたくさんあるが、コロナだからこそ出来ることも同じくらいあると思う。人との繋がり大切さを感じることが出来たのもコロナのおかげだと気付けた。この気付きで今一度、自分の他人に対する行動や言葉遣いを見直してみようと思った。

また今回のツアーはコロナ禍での観光地としての役割について興味を持ち参加したが、他にも伝統文化や歴史について学ぶことができた。普段は自分の興味があることでしか調べようとしないので、新しいことを知り視点が増えたように感じた。またこのような機会ではしか交流することがなかった、他学部や違うキャンパスの方はもちろん、自分より倍以上の人生経験をされた方と左義長まつりという一つのテーマに関して真剣に話せたことはとても貴重な経験だと思う。

「近江八幡スタディツアーを終えて」

私は近江八幡左義長まつりのスタディツアーを終えてまず始めに、「近江八幡には若い力が溢れている！」と感じました。ではなぜ近江八幡は若い人が集まるのか、その理由を自分なりに 2 つ考えてみました。

まず 1 つ目が、若者の興味をそそるものがたくさんあることです。例えば、食べ物で白雲館の近くでは和と洋どちらのスイーツも楽しむことができました。私はクラブハリエのカフェでロールケーキを食べましたがとてもおいしく、写真映えする見た目だと思いました。また、別日にラコリーナに寄ったのですがさらに多くの種類のスイーツがあり、感動しました。スタディツアーの一日目のお昼ご飯では、おでんを食べ赤いこんにやくに驚きました。近江八幡には魅力的な食べ物がたくさんあると実感しました。



いろんな世代のパワーが溢れる左義長まつり

2 つ目は、近江八幡に住む方々が若い頃から左義長まつりに触れているということです。左義長まつりのダシを見学させてもらったときに、「小さいときに見ていた大人たちに憧れて、大人になってからも祭りに参加している」とい

う大学生の話を伺いました。祭り当日、街を歩いていると、子どもがしまじろうのダシを持って歩いているのが見えました。とても可愛らしく癒やされたのですが、その後大人が担ぐダシが来たときにあまりの迫力に圧倒されました。スタディツアーでダシ自体は拝見させていただいたのですが、実際に人が担ぐとさらに高さが出て迫力が増していると感じました。また、かけ声や歌が街に響くと街の雰囲気も変わり、私自身も一緒にかけ声を口ずさみたくなりました。そして私が特に印象に残っているのが、ダシに乗せてもらった子どもたちの姿です。2 歳か 3 歳くらいの子どもの大きなダシに乗せられて喜んでいたり、泣いてしまったりまた無表情だったりといろいろな顔を見せてくれました。そのダシに乗った子どもたちや小さいダシを持っていた子どもたちが、話をしてくれた大学生のように大人に憧れを持ち、将来、左義長まつりを担っていくというサイクルが良いなと思いました。子どもの頃の経験があるから、一度街を出た人も祭りの時は帰ってきたり、若者が街にとどまったりする 1 つの理由になるのではないかと思います。

このようなことから、近江八幡には若い力が集まるのだと私は考えました。お祭りと聞いて、私は、年配の方が盛り上げるイメージだったのですが、近江八幡では若い方も負けじと祭りを盛り上げていてそのイメージを覆されました。この数日間で近江八幡の様々な魅力を発見できたので、これからはさらに魅力を発見できるように近江八幡を訪れたいと思います。ありがとうございました。

○海外体験学習プログラム／アフガニスタン【春季】

■参加学生	
今井 杏（経済学部 国際経済学科 4年次生）	森本 大輔（経済学部 国際経済学科 4年次生）
埴 風（文学部 歴史学科 3年次生）	堀井 涼花（農学部 食料農業システム学科 2年次生）
野村 峻舜（文学部 真宗学科 1年次生）	山本 蛭太（文学部 真宗学科 1年次生）
芦田 亮佑（法学部 法律学科 1年次生）	図師 菜々香（社会学部 現代福祉学科 1年次生）
中村 あや（社会学部 現代福祉学科 1年次生）	森川 鳳蘭（農学部 食料農業システム学科 1年次生）
■テーマ 「みんなで考えよう アフガニスタンの事 アフガニスタンをテーマに現地の状況と女性のエンパワメントについて考える」	
■企画・引率 吉田 裕貴（ボランティア・NPO活動センター ボランティアコーディネーター）	
■協力者・団体 一般社団法人平和村ユナイテッド 小野山 氏／EJAAD JAPAN 筒井氏、ジェニファー氏	

1. 目的

今回はオンラインの良さを活かしつつ、実際に国内で活動する団体の活動場所を訪れる事で日本にいても実践できる国際協力について学ぶ事が出来るプログラムを企画します。

2021年8月、アフガニスタンでは状況の急変があり、日本でも社会的関心が高まりました。アフガニスタンの現状はどうか、メディアの情報だけを信じていいのか。実際に現地で活動しているNGOからお話を聞く事でより関心を持ってもらう事を目的に企画しました。

当初、第二部はフィールドワークを予定していましたが、まん延防止等重点措置の発令に伴い、学内教室を利用し、感染症対策を徹底した上で対面形式にて開催しました。

2. プログラム内容

(1) 事前学習

アフガニスタンの現状や歴史、また今回ご登壇いただく団体の事について各自でまとめ、ワークシートを提出してもらいました。※第一部のみの参加者は除く

(2) 第一部『オンラインスタディツアー』(Zoom)

1月13日（木）18:00～20:00

小野山代表理事を ZOOM にお招きし、講演いただきました。写真や動画も交えながら政変前後のアフガニスタンの様子や団体の支援の状況についてお話してもらいました。グループディスカッションや質疑応答も含め、熱いメッセージを受け取りました。・自己紹介

(3) 第二部『フィールドワーク』(学内開催)

2月5日（土）13:30～16:00

学内に筒井・ジェニファー両共同代表をお招きし、団体の活動内容や女性のエンパワメントについて、アフガニスタン現地との中継を交えながら実施しました。また団体の活動を若い世代に広めていくためにどうすべきか、参加学生同士でディスカッションをしながら考えました。SNSの有効利用などの提言がなされました。

3. コーディネーター所感

夏の海外体験学習プログラムのアンケートではアフガニスタンについて学ぶ機会を作ってほしいという声が多く挙がりました。政変直後はメディアで報じられる機会は多かったものの、時間が経つに連れてそれも少なくなっています。

今回は政変前から支援をしていたNGOのお話を聴いて、より自分事にアフガニスタンの状況について理解する事が出来たと思います。また、第二部では現地の方にも短時間ではありますが、オンラインで繋いでお話を伺う事ができました。実際に現地の生の声を聴けた事は多くの学生にとって貴重な経験であり、心に響いたのではないのでしょうか。

今回の経験が成長の一助になっている事を願います。

〈報告者：吉田 裕貴

（深草キャンパス コーディネーター）

アフガニスタン。日本から約 6 2 0 0 キロ離れた中東にある一つの国。私は、本プログラムに参加する前、日本で報道されているアフガニスタンの現状をどこか遠い世界のように見ていた。ところが今回、私が当初そのように感じていた自分の迂闊さに気付かされることとなる。

本プログラムの 1 日目は、「一般社団法人平和村ユニテッド」の小野山さんに話を伺った。アフガニスタンはよく「大国の墓場」と表現されるが、今アフガニスタンで繰り返される戦闘行為の多くは、国際社会が行ってきた武力介入に対する復讐であり、「正義のための戦い」なのである。そこで、平和村ユニテッドは、アフガニスタン人に対する平和教育などを行うことにより、「力の信条からの脱却」や「非暴力で紛争のない平和をつくる」ことを目指している。

私は、小野山さんに「日本も戦争を経験している国。アフガニスタン人にとって日本人はどういうイメージなのか」と尋ねた。すると意外な回答がかえってきた。

「欧米とは違うというイメージがある一方で、日本も国際社会の一部だと否定的な見方をする人もいる。日本も戦争中は鬼畜米英というスローガンのもと総力戦状態で戦っていた。日本もアフガニスタンも同じだ。アフガニスタンを特別視してほしくない。」この言葉で私が当初感じていた「遠い世界で起きている異世界のこと」という認識の甘さは打ち砕かれた。

2 日目は、刺繍を通じてアフガニスタン女性の自立支援を行う「EJJAD」の方々に話を伺った。現在、アフガニスタンの女性は様々な制限により不安を抱えた生活を過ごしている。EJJAD は、そのような女性を一人でも救い、力づける活動を行っている。

両者の話には、共通点があった。それは、私達のような若者の力が大きいということである。たとえば、アフガニスタンに住む若者の一部が SNS で戦争を止めることを発信した結果、一時的に戦闘行為が止め

られたことがあったという小野山さんの経験や、若い人と交流することで新たなアイデアが生まれるという EJJAD の方々の言葉が、その影響力の大きさを確実なものにしている。

しかし、その力を発揮するには、アフガニスタンの現状は同じ社会で起こっている現実であり、それを引き起こした経緯には国際社会で共に生活をする私たちにも深く関係することであるという受け止め方が必要ではないだろうか。国際社会で暮らす一人一人の慎重な判断の積み重ねが、今アフガニスタンが有する数多くの困難を解決の方向へと導くだろう。そして同時に国際社会で起きる様々な課題を、自分ごととして考えられる正しい大人に私もなりたいと切実に思った。

現在も大量の難民が発生している他、テロや麻薬の問題、そして食糧不足や自然災害による被災に見舞われている中で、EJAAD の方々に講演というかたちでお話を聞けたことは貴重な体験であった。

本レポートでは、講演会の中で得た知識を中心に今後の自分につながることや、グループワークで行った、「どのようにすればアフガニスタン刺繍が普及するか」について論じていく。

まず、事前学習を踏まえて、印象に残っているキーワードは、「女子が学校に行っていない¹」、「インフラ問題」、「国境なき建築家集団」がある。しかし、筒井さんやアブドゥルさんは、「アフガニスタンを特別視しないで欲しい」や「タリバンとアフガニスタンは別であり、全部が全部、悪ではない」と示していた。これを通して、アフガニスタンの歴史や現状、そして、日本との交友関係について学びたいと考えることができた。

アフガニスタン刺繍をどのように普及させていくかについて、私たちの班では、『どのように売るか』よりも『まずは知ってもらうこと』を念頭に議論した。議論の中では、刺繍をメインとせず、どこか違う企業と連携し包装に使うなどのアイデアが出た。しかし、それでは、刺繍をしているアフガニスタンの女性に利益はあまり望めない。そこで、スターバックスが掲げている『あなたの一杯が復興支援に』を参考に、アフガニスタン刺繍を販売してはどうだろうか。そうすることで、アフガニスタンの現状や女性が強いられている状況を認知してもらえると同時に、寄付金も募ることができるのではないかと考える。今後について、EJAAD が更新しているブログでは、『クラウドファンディングを始めまし

た』や『識字教室を始めました』など女性支援プログラムを中心に積極的な取り組みが行われている。このような取り組みが行われていることを知り、多くの支援団体や活動について認知していきたいと考えている。加えて、アブドゥルさんの学生向けメッセージでもあったように、言語を習得したい。言語を習得することでより専門的な話もすることができるからだ。実際に2月5日は、ジェニファーさんとお話しをする機会があったが、受け身になってしまった。この経験もあり、まずは英語の習得をしたい。

実際に現地に行くことはできなくても印象深いプログラムとなり、今後もこのようなボランティアには積極的に参加していきたい。

¹ アフガニスタンに残っている女性ほど英語が話せない。

思っていたよりも自分はアフガニスタンについて知らず、他人事のように思っていたんだと自覚しました。もちろんアフガニスタンの現状について自分なりに何かできないかという気持ちがあってこのプログラムに参加したのですが、もっと真剣に考えるべき問題で、やろうと思えば支援出来ることはたくさんありました。危険な地域だから自分の手には負えないということはなくて、日本でも必死に活動している人がいることに気づかされました。

とはいえ、平和村ユニテッドの小野山さんにお聞きした内容には驚かされました。タリバンに占領された日について、予兆なく、一晩で事態が一変し、抵抗なく占領を受け入れた町もあり、それ程までにタリバンの力は強まっていたこと、それが圧倒的であったことをしきりに話されていました。

また、タリバン政権下において、国内で日常的に極刑が行われたり、旧政府関係者の惨殺、彼らへの暴力が今も続いていること、深刻な貧困・飢餓の悲惨さを聞き、アフガニスタンの人々が依然として安心して過ごせていないことに強く危機感を覚えました。

「力による統制はうまくいかなかった」「アフガニスタンは大国の墓場」「力ではない、対話による解決が必要」という理念が、実際にアフガニスタンの人々によって実践され、暴力の連鎖から子供たちを断ち切る活動が積極的に現地でなされていることを知り、私も今は直接的に参加できなくとも、その事実を友人と共有し、広げていくべきだと感じました。

一方 EJAAD の方々の活動は、大阪の地域の方や学生を巻き込んだもので、とても興味深かったです。伝統工芸品を日本の支援の懸け橋にすることには、物質的な援助のつながりだけでなく、作った人の思いや存

在の認識、アフガニスタンの文化や歴史が付与されていて、私達とアフガニスタンの人々との水平方向の関係づくりを可能にすると思います。支援者と被支援者ではなく、遠い場所に住む友人のような関係。アフガニスタンの女性たちがいつか日本に自分たちの足で来て会えるようになればいいなと思いました。

お話の中で印象的だったのは、現地で数人の女性の識字教育が始まっていることです。ニュースでは女性の権利が侵害され、学校に行けない、仕事をさせてもらえないということしか知り得ませんでした。このような活動も一部では行われていることには希望になると感じました。

プログラムの後半、グループワークで女性達のつくる刺繍作品をどの様に日本に広め、購入してもらうかというテーマについて意見を出し合いましたが、EJAAD の方々は積極的に若者のニーズや新しい商品づくりに取り組もうとされていて、学生の意見に真剣に耳を傾けていただけました。

「シンプルなデザインの刺繍作品」という意見には強く賛成します。EJAAD の存在を知ってもらうことこそ支援の輪を広げるために重要だと私は考えます。平和村ユニテッドの活動についても言えますが、自分なりの国内の支援活動との接点を見つけ、継続してそれについて考えていくことこそ今私がすべきことだと思いました。

今回の海外体験学習プログラムで、平和村ユナイテッドと EJAAD の方からお話を聞いた。

平和村ユナイテッドの小野山さんは「非暴力で平和をつくるのは幻想か?」というテーマでお話をしてくださった。アフガニスタンの急変の様子、その後、今後の課題を具体的に教えてくださり、小野山さんがこれまで出会った方のこと、平和村ユナイテッドの活動などを紹介してくださった。

特に印象に残ったのは、平和村ユナイテッドの活動の一つ、戦争遺児をサポートする様子についての動画である。戦争で父を亡くした子供は、父の復讐をするために、殺し合う可能性がある。そのような殺し合いが起こらないように、平和教育をする。戦争のトラウマを癒し、楽しい時間を過ごすために、多くの子供たちが集まってゲームなど交流をしていた。そこにいる子供たちはとても良い笑顔だった。しかし、その中に女の子は一人もいなかった。アフガニスタンは女性が外出するのはとても危険な状況である。女の子たちも外で遊んだり、友達を作ったりしたいだろうと思った。性別が違うだけで、平和教育を受けられなかったり、外に出て遊ぶことができなかったりし、経験できることが大きく違ってしまうのは不平等であると感じた。

EJAAD は刺繍をベースに魅力的な商品を作ることを目指している。タリバンの支配以来、男性家族が失職し、家族の生活を支えるため、刺繍による女性の収入は重要である。実際にアフガニスタンの女性が作った刺繍商品を見ると、大変丁寧に細かい刺繍が施してあった。

このような刺繍商品がどうやったら日本で売れるかのアイデアを考えて、学生同士で話し合いをした。さまざまなアイデアを出し合い、EJAAD の方に参考になったと言ってもらって、自分たちが少しでも力になれた気がした。

この海外体験学習プログラムを通して、自分がこれまで知らなかったさまざまなことを知った。戦うことが正義だと思っている人がいること、笑わない子供がいること、家族のために

一生懸命刺繍をする女性がたくさんいることなど、さまざまなことが印象に残った。アフガニスタンが厳しい状況の中でも、平和を作るためや支援をするために活動されている平和村ユナイテッドと EJAAD のことを知り、少しずつでも良くなってほしいと強く思った。

これからも国際情勢や社会の問題に関心を持ち、世界にはどんな人がいて、どのような問題があって、どのようなアクションを起こすべきなのか考えたい。

私は、以前から国際問題に少し興味を持っており、2021 年のタリバンによる政変についても連日のニュースなどで関心を持っていたため、今回の海外体験学習プログラムに参加した。

第 1 部では、平和ユナイテッドさんによる講演で、「非暴力で平和をつくるのは幻想？」をテーマにタリバンが政権を掌握した当時の状況から平和ユナイテッドを含めた NGO 団体のタリバンとの関わりを理解しながら考えることができた。特に 2 つの話が印象に残った。

まず、タリバンが NGO と協力しているということ。想像するとタリバンが統治するうえで、他団体の存在は、邪魔なものだと思っていた。実際は、タリバンは市民活動抑圧したい考えは強くなく、上手く統治したい気持ちが強い。しかし、政権掌握の事情から統治行為は不可能であるという点から、NGO を必要としていたのだ。

次にピースアクションという活動。これは、紛争を経験したなど様々な事情を抱えた人が主体的になって将来的に自立していきこうという活動であり、戦争のトラウマを抱えても良い方向へと進もうという姿勢に共感した。

第 2 部では、EJAAD さんによる女性の自立支援の取り組みの講演。実際に現地とオンラインで繋ぎ、アフガニスタンの状況を知る機会となった。自立支援の取り組みは、女性の刺繍作品を海外で販売する活動であったが、海外で販売し、女性が安定した生計を立てるのは難しいと感じた。現在アフガニスタンからの流通は厳しく、また一商品一商品手作りのため日本を含めた海外の人が商品を手に取るには、相当工夫が必要であるからだ。

今回の海外体験学習は、アフガニスタン

の状況や NGO 団体の影響力など初めて耳にする情報が多かった。アフガニスタンは困難な状況ではあることは間違いないが、タリバンの国内での影響や行動などニュースで報道されているものとは、少し違った部分もあった。一方的にタリバンの行動は、全て悪だとこれまでは決めつけていたが、本当にそうなのか講演を聞き、考え直す必要があると感じた。また問題の本質を理解するには、実際に経験した当事者に話を聞くことが大切だということも体験学習を通して学ぶことができた。

この二部にわたるアフガニスタンのオンラインスタディーツアーを通して、私は、紛争や権力集中の弊害は、子どもや女性といった社会的に弱い地位に位置づけられる人々が被りやすいこと、そしてそれらの人々を直接支援することの大切さを学んだ。

まず、一部の一般社団法人平和村ユナイテッドの小野山さんのお話では、紛争遺児に対する支援について学んだ。ここで特に印象深かったのが、親の敵味方関係なく、紛争遺児になってしまった子供たちを一緒に支援しておられるということだ。親の出自を聞くなどのタブーを犯してしまえば、簡単に支援計画が破綻してしまうことが考えられるが、あえて一緒に支援をすることで、子どもたちに垣根を越えた真の平和な心が育まれるように感じた。

次に、EJAAD さんのお話では、アフガニスタンで権利を制限されやすい女性に対する支援について学んだ。私の、「タリバン政権についてどう思っているか？」という質問に対し、現地にいらっしゃる職員のアブドゥルさんがおっしゃった、「タリバンとアフガニスタンの人々を分けて考えてほしい」という言葉がとても印象的だった。日本にいと、報道などの受け身のスタンスで現地の情報を得てしまうため、どうしてもステレオタイプ化してしまう。自ら主体的に情報を集め、常に現地の情勢について客観的な視点を忘れずにいなければならないことを改めて認識できた。また、緊迫の情勢の中、このような踏み込んだ質問に対しても、アブドゥルさんは真摯に答えてくださり、とても貴重な経験をさせていただいた。

このスタディーツアーを通して、アフガニスタンの子どもや女性に対し、草の根で

支援をされている方々の貴重なお話を聴くことができた。それと同時に、自分と文化の違う国における女性や子どもたちが、具体的にどのような状況に置かれているのかということ、私はあまり知らなかったことに気づかされた。自らの環境に甘んじることなく、主体的に情報を得て更新し、そして学び続けるようにしていきたい。

第一部では、『一般社団法人平和村ユニテッド』の小野山さんからお話を伺った。アフガニスタンに米軍が駐在していたときは平和かつ過ごしやすかった。（が、アメリカ軍から住民への被害は少なからずあった。）米軍がアフガニスタンから完全に撤退した後、タリバンが勢力を拡大しアフガニスタン全体を支配した。

タリバンが政権を握ったことで、女性の行動範囲が狭められた（アフガニスタン人の女性のみならず現地にいる全ての女性でさえも）、戦闘が身近になり命の危険と隣り合わせ、支援団体の活動の継続が難しい状況、現地の方と連絡が困難、現地からの報道が規制されている、タリバンが設ける犯罪のラインが厳しくなり罪を犯すと公開処刑されるというむごい処置を受ける等の 2000 年～2009 年までのアフガニスタンの情勢が戻ってきた。

小野山さんが活動している団体では何らかの形で平和の実現を訴えている。例えば、女性が執筆した本を読む、スポーツ（駅伝）、伝統闘技などである。現在は思うように支援ができるわけではないが、日常生活の支援と平和の教育をしている。

第二部では、『アフガニスタン女性支援プロジェクト EJAAD JAPAN』のジェニファーさん、筒井さん、から話を伺った。この団体は伝統的な刺繍作品を通してアフガニスタンの女性に学びと働き場を提供する活動をしている。伝統的な刺繍作品は主にアフガニスタンの女性が制作し、女性が手に職をつけ家族の生活を支え、自信を持つことを目的としている。アフガニスタンでは男女問わず、失業者が多いため、収入がなく、生きるだけで精一杯のため、この収入が貴重である。

この団体は国連とはつながっていないた

め、ある程度、制限なく活動する事が可能になっているそう。やはり、タリバンが政権を握ったことで貿易に関わるほとんどが遮断され、アフガニスタンの女性がつくった商品を日本に送れない、支援物資が届かない、外貨が使えず、現地は経済的に困窮している。

この海外体験学習プログラムで自分の知識や情報収集の浅さを実感した。また支援するのにも思い通りに物事がうまく進まないといった支援する側も様々な葛藤があることを聞くことができた。また、この体験学習がなければアフガニスタンの情勢の大変さも知ることができなかっただろう。

新聞やニュースで見る中東の国といえどもまだ紛争が絶えず危険で近寄りがたい国々と印象をもつ人も多い。まだ人道支援が必要な国々という事実は、今なお課題である。私自身、ただ危険な国だという思い込みがあった。しかし今回、平和を望む現地の人の取り組みを知り、その思い込みは間違いであると感じた。そして同じ地球に生まれて幸せを願う人間として共に平和を作り上げていきたいと思った。

今回の海外体験学習プログラムではアフガニスタンと日本を繋ぐ支援とタリバン政権拡大に伴う現状について話を伺った。タリバンが勢力拡大した 2021 年 8 月は町中に兵士が歩いているという恐怖に人々は不安にかられていた。子供や女性は家の中で待機している日が続く強き者の圧力に抵抗できない不平等さが嘆かわしいと私は思った。

日本で生活していたら分かることのない生活の障害を現地の人は感じている。銃声に怯えることや家族を失うこと、それが身近にあることが痛々しい事実である。わざわざ対立を暴力で解決することで何か良いことがあるか。話を伺った NGO「一般社団法人平和村ユニテッド」の中心とした取り組みの 1 つに『現地の人たちが平和について考える機会を設ける』という活動がある。村の人たちが集まって自分たちの困りごとを対話によって解決しようと試みる。例えば子供は学校で行われる体罰についてその意義を話しあう。こうして人権を守る活動が非暴力の形で作られていく。

第二部では「EJAAD JAPAN」の活動を伺った。主な活動内容として、刺繍づくりでアフガニスタンの女性を支援する団体である。刺繍づくりでどう支援するのか疑問に思ったが、それを売って得た収入が支援金

となったり刺繍で皆が集まる憩いの場となり、制作自体が楽しく居られる居場所であったりする事を学んだ。

他の参加者とどうすればもっと売れるか、刺繍作りの案を考えた。ワンポイント柄やオンラインショップの展開といったアイデアが出た。今回のアイデアを参考にしてくれるだけでもほんの僅かだが国際協力に関われた気がして嬉しいと思った。

現地で活動する人の声を聴いて今までの町や教育が発展途上だという情報が本当であり、しかしよりよい未来に変えようと努力している人たちがいることが分かった。いま自分にできることは何か考えるきっかけになった。

今回の海外体験学習プログラムでは、平和村ユナイテッドさんと EJAAD さんにアフガニスタンの現状とアフガニスタンで行っている活動について話を聞いた。

平和村ユナイテッドさんは、アフガニスタンで平和教育などの活動を行っている。アフガニスタンではタリバンによる政権掌握が起きて、政治的に不安定な状況だ。しかし、このような問題は突然始まったことではない。紛争が続くアフガニスタンでは、力や暴力で物事を解決するという構造ができている。そのため平和活動が咎められ、簡単に平和とは言えない状況がある。そんな中、平和村ユナイテッドさんは村の集会などで平和教育をして、非暴力での平和を目指している。集会では女性が集まって話し合うなど平和への活動が進んでいる。また、戦争遺児のサポートも行っている。

私は、人道支援は必要だが、平和への解決にはならないという言葉が印象に残っている。この言葉を聞いた時、平和村ユナイテッドさんの活動は、今だけの活動ではなく未来への活動であると感じたからだ。アフガニスタンの問題を考えるときには、長期的な視点を持って考えていくことが重要なのではないかと思った。

EJAAD さんは、アフガニスタンの女性を刺繍で支援している。アフガニスタンでは女性の権利が抑圧され、就労や教育の機会を得ることが難しい状況だ。また、外出することも危険な状態だ。EJAAD さんはアフガニスタンの女性が作った刺繍を販売することで、女性達への就労の機会を作っている。刺繍はアフガニスタンの伝統工芸の継承にもなっている。しかし、タリバンによる政権掌握の影響で刺繍が日本に届かないだけでなく、物価が上がり刺繍に使う材料の値段も上が

っている。このような状況の中でも、アフガニスタンの女性は刺繍を続けている。

私は、刺繍がアフガニスタンの女性にとって仕事というだけでなく心の支えになっているのではないかと思った。女性の権利が抑圧されている中で、刺繍は女性に自信を持たせているのだと感じた。

今回の海外体験学習プログラムを通して、その国の文化や歴史を知ることが重要だと改めて感じた。今後は EJAAD さんの刺繍を購入してアフガニスタンの文化を知り、この活動を友人にも広めていきたいと考えた。また、ボランティア活動や支援活動をする時には、今だけでなく未来にどう繋げていくのかを考えていきたいと思った。

今回の講演会で私が学んだこととして、アフガニスタンは多民族、多言語国家であり、文化が豊かであること、1979 年のソ連侵攻から平和になっていないこと、たくさんの差別があること、女子学校が狙われるという事件があったがそれでも学びたいと強く願う女性がたくさんいることなどのたくさんのことが挙げられる。

そして、特に私が印象に残ったこととして、女性差別が挙げられる。女性差別がひどいため、女性はほとんど家から出られず、保守的になってしまっているというお話を聞いた。家族を養うため、働きたいけどなかなか働けずお金を得られないという現状がある。

そこで、一つの家族を救いたいと活動できるボランティアの方々は本当にすごいなと強く感心し、私自身もっとアフガニスタンのことについて学んで、支援していける立場になりたいなと感じた。

税関の関係で物は届かないかもしれないけれど、インターネットは繋がっていることを活かしてもっとアフガニスタンの貧困などを救いたいなと強く感じた講演会でした。